

# CONTENTS

## 文化庁月報

1994 **5** No.308

### 特集●生活文化の振興

- 巻頭言 生活文化をめぐって 加藤秀俊 4
- 生活文化振興への取組み 6
  - (社)日本おもと協会／(社)日本将棋連盟／(社)全日本愛鱈会／
  - (社)日本フラワーデザイナー協会／(財)ファッション振興財団／
  - (社)日本コントラクトブリッジ連盟／(財)日本いけばな芸術協会／
  - (財)人形美術協会／(社)表千家同門会／(財)日本きもの文化協会／
  - (財)日本棋院／(財)日本食生活文化財団／(社)日本建築美術工芸協会／
- 福岡県の生活文化行政 16
- 盆栽文化の国際化事業に思う (社)日本盆栽協会 16

### 都道府県のページ

- ご存じですか? こんな文化財⑩
- 銅造如来坐像、長崎市東山手・南山手 20
- 一度は行きたい博物館・美術館⑩
- 鹿児島県立博物館 23

・「人間国宝を訪ねて」の連載開始にあたって… 26

### ちよつと一息

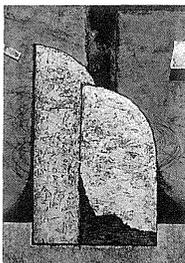
女性の映画100年／松本侑壬子…18

### ACA (Agency for Cultural Affairs) NEWS

- 重要文化財の新指定 (美術工芸品関係-1) ……29
- 日本芸術院賞受賞者決まる ……34
- 平成5年度芸術選奨決まる ……36
- 平成5年度芸術作品賞決まる ……39
- 平成5年度文化庁優秀映画作品賞決まる ……40
- 平成5年度舞台芸術創作奨励賞決まる ……42
- 平成6年度中学校芸術鑑賞教室公演日程決まる ……43
- 平成6年度移動芸術祭・同巡回公演  
春季公演日程決まる ……44
- 著作権法利用講座⑩ ……28
- 芸術文化振興基金ニュース ……46
- 今月の国立劇場 ……47
- 編集後記 ……48

### イベント案内

- 運慶・快慶とその弟子たち／奈良国立博物館 ……45



「軌跡-92B」  
 嶋田善雄／作 (平成4年度文化庁賞上作品)  
 しまだ・よしお／昭和24年長野県生まれ。  
 48年日本大学芸術学部卒。53年日本版画協会  
 展出品以後、毎回出品するとともに、同年より  
 個展も多数開催。54年第一回JAG展銀賞。  
 平成4年国展新人賞。現在は児童美術家連盟  
 会員。

イラスト／赤羽根秀一

# 特集 生活文化の振興

一九五〇年代から発展を上げてきた文化人類学の書物を読んでもみると、「文化」とは「ひとびとの生活様式」として定義されていることに気がつく。わたしのようにこの字間を勉強してきた人間は、もっぱら「文化」をこのようなものとして理解してきた。具体的に言えば、われわれの生活を形成しているもろもろの要素、たとえば衣食住にかんすること、ことごとくのがらが「文化」なのである。別なことばでいえば「ふだんの暮らし」そのものが「文化」なのだから、実のところ、「生活文化」ということば自体が同義反復的で、なん

となく意味がはっきりしない。  
しかし、このことばが「文化的」という形容詞になったときには、人間の営みのなかで高級なことがらを意味することがふつうである。たとえば憲法が保障する「文化的な生活」

## 生活文化を 言頭巻 めぐって



放送教育開発センター所長  
加藤秀俊

といった場合には、けっして日常生活というだけではなく、諸々の文明的利便や芸術性などを生活のなかにとりいれる、というのがその趣旨であるかのようにきこえる。いささか極端な対比をしてみると、われわれの意識のなかには、ありのままの生活自体を「文化」としてとらえる立場と芸術などを「文化」として位置づける立場とが共存しているのである。前者がアメリカ的用語であるのに対して後者はドイツ的観念だ、とみてもよからう。さて、このような用語や観念の曖昧さを承知のうえで、文化庁の文化政策推進会議は、その部会のひとつを「地域文化・生活文化小委員会」とし、過去三年間にわたって検討を続けてきた。ことしもこの部会は続き、わたし自身もそのなかで勉強させていたでいてる。その討議の結果はいずれ正式の文書になって発表されることになるから、ここではふれない。以下に記すことはこの懇談会だけではなく、いくつかの研究會などでわたしが受けた印象である。

まず第一にわたしが痛切に感じたのは日本社会での生活文化の多様性である。いうまでもなく日本の国土は亜寒帯から亜熱帯におよぶ長い列島によって形成されている。したがって、それぞれの地域の生活は実に様々だ。北海道や東北地方での住まいは冬の寒さにそ

なえているのに対して、沖縄などではどのようなにしたら涼しい生活ができるか、について工夫を凝らしている。民俗行事のようなものをとりあげてみても、東日本と西日本ではかなり様子がちがう。だからこそ、「生活文化」は「地域文化」と不可分な関係にあり、地域ごとのこまやかな研究が必要なのだ。「日本の生活文化」といった一般化された観念は成り立ちにくい。

そのことは同時に「生活文化」を考察する場合の対象が市町村という小規模の単位であることが望ましい、ということも意味する。実際、わたしなどはこれまで日本各地の村をたずねて勉強してきたが、生活文化はひとつの村のなかでさえちがうことが少なくない。むかしのことばでいうと「字(あざ)」ごとに生活様式や習慣、習俗は異なるのだ。したがって、生活文化、地域文化は市町村を基盤にして研究されるのがよいのではないか。

第二に、生活文化は日々に変動し続けている、ということだ。たとえば、食生活ひとりあげてみても、それぞれの地域が伝統的にもついていた食習慣は流通の高度化などによっておどろくほど変わった。これからも変化は続くだろう。そのことは、「地域文化」を固定したものとしてとらえることがかならずしも正しくないということの意味する。社会全

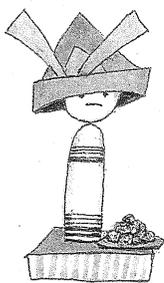
体が進歩、発展すれば「伝統」も変化するのが当然だし、それは国民生活の向上のために望ましいことでもある。実際われわれが簡単に「伝統」ということばで名づけているものの多くは近世、あるいは近代の産物だ。古いものを大切にするのはいいことだが、およそ「文化」というものは変化するものだ、ということ念頭において考えないと保守的な懐古趣味になってしまう可能性がある。

その意味からも「文化財」のなかに「生活文化財」もこれから含めて考える必要がある。せまい意味での「文化財」はたとえば神社仏閣、工芸・美術品などのことだが、人間が生活のなかで使ってきたものも「文化財」だ、とわたしは思っている。それらは各地域の郷土資料館などに保存されているし、それをもっともふさわしい方法なのかもしれないが、少なくともどの地域にどのような生活文化関連の文化施設があり、そこになにが収蔵されているかをデータベース化することも必要であろう。すでに消滅しかけている生活文化財などは、たとえばそれを映像化するという方法で保存されることが望ましい。理想をいえば、それはたとえば、アメリカの Smithsonian 博物館のようなものにも整理されるのがよいのではないか。そこには十八世紀

の民家、民具はもとより、かつて北米大陸を

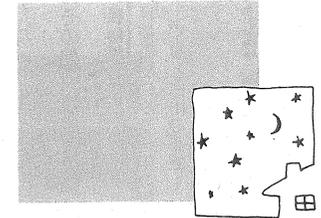
走った機関車、最初の自動車から有名な俳優の衣装までみごとに保存されている。そうした夢をわたしはもっていたい。

しかし、なによりも大事なことは、そもそも生活文化というものがぐくあたりまえの生活者の自発的な知恵によってつくられ継承されてきたものである、という事実だ。それはだれかによって指導されたり強制されたりしたのではない。その有形、無形をとわず、文化財としての生活文化は名もなき日本の庶民がながい年月の努力によって構築してきたものなのだ。そのことこそが文化政策、文化行政のなかで「生活文化」を位置づける基本であろう。別なことばでいえば、政策、行政の担当者は生活文化のなから「文化」ほんらいの意味を学ぶべきなのであって、それを「指導」しようなどという尊大な姿勢をとることはゆるぎのないのである。



5月文化庁行事予定

- 10日・平成6年度芸術家在外研修員懇親会（国立教育会館内レストラン）
  - ・平成6年春の叙勲 勲章及び賜杯伝達式（日本青年館）
- 13日・平成6年春の紫綬褒章、藍綬褒章及び黄綬褒章伝達式（如水会館）
- 20日・文化財保護審議会（文化庁）
- 25日・都道府県宗教法人事務主管課長会議（都道府県会館）
- 31日・日本芸術院授賞式（日本芸術院会館）
  - ・日本芸術院新会員・受賞者宮中お茶会（宮中）
  - ・日本芸術院新会員・受賞者文部大臣招待晩餐会（赤坂プリンスホテル）



文化庁月報 5月号 (通巻308号)

平成6年5月25日印刷・発行

編集—文化庁  
〒100 東京都千代田区霞が関3-2-2  
発行—株式会社ぎょうせい  
本社 〒104 東京都中央区銀座7-4-12  
電話03(3571)2126  
営業所 〒162 東京都新宿区西五軒町4-2  
電話03(3268)2141 (代表)  
振替口座 東京9-161番  
印刷所—㈱行政学会印刷所

定価530円（本体515円）送料76円  
年間購読料6360円  
本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込み下さい。

広告の問い合わせ・申し込み先  
㈱ぎょうせい営業第一課宣伝係  
電話03(3269)4145 (ダイヤルイン)  
©1994 Printed in Japan  
ISSN 0916-9849

編集後記

今月号より新たに担当となりました。誌面のより一層の充実を図っていかうと思っておりますので、よろしくお願いたします。春眠暁を覚えず、というわけではありませんが、五月号の発行が大幅に遅れてしまい、大変心苦しく思っております。新年度早々このようなことでは先が思いやられますが、来月号以降、順次発行日を詰めていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

さて、今月号では、初めて「生活文化」を特集として取り上げました。「生活文化」は私達の日常生活と表裏一体をなすものであり、行政がどこまで介入できるかという難しい問題も残っており、まさにこれから検討していかなければならない新しい行政分野のひとつではないでしょうか。また、今月号では、新企画「人間国宝を訪ねて」の予告編として、高田都耶子さんのお話と解説でまともな話をしました。本編は、いよいよ来月号からはじまりますので、乞う御期待。

(栗)